

| 海外アカデミック・ディスカッション | |
|------------------------------|--|
| ロマ民族音楽研究に関するディスカッションとゼミ参加の概要 | |
| 滝口 幸子 | 比較社会文化学専攻 |
| 期間 | 2008年11月16日～2008年11月30日（ウィーン） 2008年11月30日～2008年12月8日（ブダペスト） 2008年12月8日～2008年12月14日（ウィーン） |
| 場所 | ウィーン（オーストリア）、ブダペスト（ハンガリー） |
| 施設 | ウィーン国立音楽大学民俗音楽研究および民族音楽学研究所 ハンガリー科学アカデミー音楽学研究所 |

【内容報告】

報告者は、ロマ民族のサブグループ、ロヴァーラの間で伝承されている歌の伝承プロセスとメカニズムの考察を博士論文のテーマに取り組んでいる。現在、2003年からウィーンで断続的に行っているフィールド調査と現地で収集した一次資料・文献を基に、論文の中で重要な位置を占めるバラードの採譜およびロマ音楽家とのインタビューや参与観察で得た資料のまとめを行っているが、その過程において、作品を分析・比較したり、資料を音楽の伝承とエスニック・アイデンティティやロマ民族運動との相互関係から考察したりするための方法論にさまざまな疑問や問題点が生じている。そこで、今回の海外アカデミック・ディスカッションでは、ロマ民族の音楽について長年研究している民族音楽学者が所属する研究所を訪問し、彼らとの個人的なディスカッションおよび研究所で開講している講義への参加を目的とするプログラムを実施した。

今回報告者が訪問した研究所は、ウィーン国立音楽大学民俗音楽研究および民族音楽学研究所とハンガリー科学アカデミー音楽学研究所である。

ウィーン国立音楽大学民俗音楽研究および民族音楽学研究所では、オーストリアにおけるロマ民族音楽研究者の第一人者ウルズラ・ヘメテク准教授の指導のもと、報告者の研究テーマに有益であると判断された講義「博士課程学生のためのゼミ」、「民族音楽学」、「研究演習」に参加した。「博士課程学生のためのゼミ」では、ネットル（Nettl 1983, 2005）の論文を参考に、音楽の採譜や音楽の普遍性について議論を交わした。特

に音楽の採譜に関しては、報告者も含めたフィールドや研究対象の異なる学生が各自抱える問題に対し、さまざまな対処法が検討された。「民族音楽学」では、ウィーンで1991年に発足したロマ民族の自主的自助組織ロマノ・ツェントロの活動を対象に、民族運動が音楽文化に与える影響について討論する場が与えられた。そして「研究演習」では、コミュニケーション技術が文化の創造に与える変化を“メディアモルフォーゼ”（Smudits 2002）という概念で捉える演習に参加し、音楽の伝承プロセスにおける新たな視点を与えられた。加えて、ヘメテク准教授との個人的なディスカッションでは、講義で得た見地および研究法についてさらに議論を交わし、また博士論文の構成についても検討を加えた。

ハンガリー科学アカデミー音楽学研究所では、ハンガリーとスロヴァキアに居住するロマ民族の音楽を専門とするカタリン・コヴァルチク博士と個人的なディスカッションを行い、ロヴァーラの間で広く伝承されているバラードに関して貴重な情報を得ることができた。例えば、報告者のこれまでの研究では、博士論文で取り上げているバラードのひとつ『蛇歌』の歌詞が、主にスラヴ語圏のマジョリティの間で歌われていたバラードに由来することが明らかになっている（Takiguchi 2008）。今回のディスカッションを通して、同様の歌詞は、ハンガリー語圏では伝承されていないことが確認された（それに関して提供された文献はVargyas 1983, László 1992）。このことは、ロヴァーラが移動のどの過程でマジョリティのバラードを受容したのか¹、また、この歌詞が、なぜ彼らの民族アイデ

ンティティの表象を担うようになったのかを考察する上で重要である。

さらに、同研究所では、コヴァルチク博士がフィールド調査で収集した『蛇歌』の録音資料を聞かせていただく機会を与えられた。録音資料は数十曲あり、さまざまな歌い手によって歌われたものであったが、その中から、現在報告者が所有しているバリエーションとは異なった音楽的特徴を示す3曲を、研究利用を目的に提供していただくことができた。

報告者の博士論文は、ロマ民族のサブグループに焦点を当てた具体的な事例研究を行うものであり、これまでロマというひとつの民族集団としてしか捉えられてこなかった彼らの音楽の多様性を明らかにしようとするものである。加えて、移動の結果異なる居住空間の中で暮らすロヴァーラの歌の伝承を、共時的・通時的双方の観点から考察しようとする試みは、従来のロマ民族音楽研究においてほとんど行われておらず、それらに関する情報も極めて少ない。従って、現地の専門研究者との情報交換およびディスカッションは、報告者にとって非常に価値あるものであり、このような機会を与えてくださった本海外アカデミック・ディスカッションには、大変感謝している。

今回得た成果は、最終的には博士論文の中で公表する予定であるが、その一部は、2009年2月7日の東洋音楽学会東日本支部例会での口頭発表および同学会誌への投稿を計画している。

最後に、ロマ民族音楽研究は、民族音楽学や文化人類学といった学術分野に大きく貢献するものであること、さらにそれは、ロマ民族の研究のみに限定されず、日本に居住する少数民族集団や移民を対象とした移動

と文化伝承の研究への応用にも期待できることを申し添えておきたい。

註

- 1 ロヴァーラは、現ルーマニア領（14世紀半ば～1855/56年）とハンガリー語圏（1855/56年以降）での長期滞在を経た後、ヨーロッパ各地さらにはアメリカやオーストラリアへ移動したことが言語学の研究から明らかにされている。

【内容報告で言及した文献】

- Dobszay, László. *Catalogue of Hungarian folksong types: arranged according to styles / Magyar Tudományos Akadémia Zenetudományi Intézet*. Budapest: Zoltan Falvy, 1992.
- Nettl, Bruno. *The Study of Ethnomusicology. Thirty-one issues and Concepts*. Urbana: University of Illinois Press, 1983. (new ed. 2005).
- Smudits, Alfred. *Mediamorphosen des Kulturschaffens: Kunst und Kommunikationstechnologien im Wandel*, Wien: Braumüller, 2002.
- Tagiguchi, Sachiko. „Transposition” of the Musical Tradition in the case of Lovara. 5th Meeting of Study Group “Music and Minorities” of the International Council for Traditional Music (Abstracts:p58), Prague/Czech Republic, 24. May - 1.June 2008.
- Vargyas, Lajos. *Hungarian ballads and the European ballad tradition vol.1, 2 (transl. by Imre Gombos)*, Budapest: Akadémiai. Kiadó,1983.

たきぐち さちこ／お茶の水女子大学大学院 人間文化研究科 比較社会文化学専攻

【指導教員のコメント】

研修者の滝口幸子さんは本学の博士課程に入学以来、一貫してロマ民族の音楽伝承について研究を行っており、すでにオーストリア政府の給付金でウィーン国立音楽大学に留学して、オーストリアにおけるロマの実態と音楽を、フィールドワークと録音資料から高い水準で研究してきている。また、こうした成果はICTM（国際伝統音楽学会）などで発表し、国際的な評価を得ている。

このような研究の背景をもっているため、今回の研修においては、オーストリアとハンガリーにおける代表的なロマ研究機関およびロマ研究の第一人者とのディスカッションを行ない、また、ゼミなどにも参加することによって、新たな情報と資料を収集することができている。オーストリアではウルズラ・ヘメテク氏、ハンガリーではカタリン・コヴァルチク氏とディスカッションを行ない、ロマ民族の伝承のプロセスに関する新たな視点を、獲得したことは、大きな収穫であろう。

日本においては、ロマ民族の音楽に関する研究は、ほとんど行なわれていない。いまだに「ジブシー音楽」という既存の枠組みの中で捉えられることが一般的であろう。民族音楽学研究は、対象となる人々の実際の生活を、

その人々とともに体験し、かつ現地での最先端の研究と接することによってはじめて、豊かな深いものとなる。研修者の滝口さんはそうした視点から、貴重な体験と資料を所有しているので、その上で今回現地の研究者とより新しい視点で議論ができたことは、研究の大きな柱を得たことになるであろう。

滝口さんの博士論文では、ロマ研究においての、国際的に高い水準での優れた成果が得られることが大いに期待される。

(お茶の水女子大学大学院 人間文化創成科学研究科 教授 永原 恵三)